



# 初雪列車

桜井あや

# 初雪列車

初雪列車

桜井あや

灰色のコンクリートの駅のホームで、少女が真っ白いチョークでお花の絵を描いていました。

「あらまあ、可愛いわね。」

背後からいきなり声をかけられて、びっくりした少女は掲示板の下に隠れました。

声をかけたのは小森おばあさんでした。小森おばあさんは困ったような笑顔をして、駅のホームの端に歩いていきました。

少女は深いため息をつきました。

—あ・・・息が白い・・・あれ?—

掲示板の下に文字が彫ってありました。

「行き先 初雪 到着時刻 初雪」

カーンカーンカーンカーン

踏み切りの音が鳴り響いた。

からっぽ田んぼの中をオレンジと緑の列車が走ってきて、駅のホームに止まりました。

降りる人は一人もいなく、列車は小森おばあさんを乗せて過ぎ去っていきました。

—こんな時間にお父さんは乗ってこない—

少女は駅のホームから列車のなくなった線路を悲しそうに見つめていました。

—今日はとても寒い—

真っ赤なマフラーをぎゅっとにぎって、灰色の空を見上げた。

すると灰色の空から鳥の羽のように柔らかで真っ白な雪が降ってきました。

少女は真っ白な手袋に雪のかけらを乗せました。

—きれい・・・—

カーンカーンカーンカーン

再び踏み切りが鳴り響きました。

—あれ? さっき列車が着たばかりなのに—

雪降る線路を見つめていると、真っ白い列車が近づいてきました。初めてみる列車に少女は立ちつくしていました。

やがて真っ白い列車は駅のホームに止まり、

ドアがゆっくりと開きました。

—列車の中・・・温かそう・・・—

少女が一步列車の中に入るとドアは閉まり、真っ白の列車は走り出してしまいました。

列車の中は暖房がきいて温かく、車内の壁は真っ白で、床や扉は木で出来ていました。イスも木製で、オレンジ色のシートがはられています。

少女は扉から少し歩いて、窓際のオレンジ色シートに座り、窓の外の風景をぼんやり見ました。

「おや、お嬢さん一人で乗ったのかい?」

少女はびっくりしてイスから落ちそうになりました。

キョロキョロ見回したけど、近くに人の姿はありません。

「こっちだよ。こっち。」

低い位置から声がしました。ななめ前の席の手すりの下に一匹のリスがいました。リスは小脇にどんぐりを抱えながら、少女にニッコリ笑いかけました。

少女は不思議そうな顔をしながら歩き、リスの真向かいの席に座りました。

「こんにちは、私の名前はしずり。よろしくね。」

リスは小さい袋の中から、小さい赤い実を少女に差し出しながら話しかけてきました。

「こ・・・こんにちは。私の名前は・・・小雪。」

小雪は勇気を出してかぼそい声で答え、小さい赤い実を受け取りました。

赤い実はとても甘い味がした。

「小雪ちゃんって言うのか～。可愛い名前だね。初雪列車にぴったりの名前だね。」

「初雪列車って何?」

しずりは小さい目をぱちくりあけて、小雪を見上げた。

「小雪ちゃん。知らないで初雪列車に乗ったのかい?」

ギーーーーー

木の扉から、えんじ色の制服を着た車掌さんが入ってきた。



「皆様、初雪列車のご利用いただきありがとうございます。切符をおきりいたしますので、お手元にご用意ください。」

小雪はおびえたように立ち上がり、しずりの目の前に座り込んだ。

「しずり、どうしよう。私切符買ってないの……。」

「小雪落ちていて。この列車には切符を持っていないと乗れないのよ。列車が来る前に初雪を受けとらなかった？」

小雪は白いコートのポケットに入れた手袋を取り出した。そして手袋をゆっくりと広げるとガラスのようにキラキラ光る大きい雪の結晶が出てきた。

「ほらあったでしょ。大丈夫よ。」

しずりもそう言いながら、雪の結晶を取り出した。

車掌さんが銀製のペンチで切符をきると、結晶は淡く光った。

「ありがとうございます。」

車掌さんは小雪をしずりに切符を返し、次の車両へと歩いていった。

小雪は淡く光り続ける雪の結晶をにぎりながら、窓の外を眺めた。

列車はいろんな場所を走っていった。

黄色や赤色、青色のマッチ箱のような家が並ぶ街を走りぬけたかと思うと、大きいウチワのような角を持つ鹿がいる深い森も走った。

やがて双子の山が見えだした頃、しずりは立ち上がった。

「あそこが私のふるさとなんだ。いつか遊びに来てね。キノコシチューや木ブドウのタルトをごちそうするよ。」

しずりは大きいリュックを背負った。

「しずり、行っちゃうの？」

小雪は不安そうにしずりをみつめた。

「人はそれぞれの道に向かうものさ。小雪には小雪の向かう駅がある。」

「でもまたいつか会える。これはその約束。」

しずりはどんぐりを小雪のヒザの上にのせると、にっこり笑顔を残して、初雪列車を降りて行った。

真っ白な車内に小雪はひとりぼっちだった。窓によりかかるように丸くなって座り、外をながめていた。

初雪列車はいつの間にか、街の中を走っていた。

小雪はさびしくなって、ぼろぼろと涙をほっぺに落とした。

「どうしたの？」

真っ白なカーディガンをはおった女性が、小雪に優しくほほえみかけた。桜色のハンカチで小雪の涙をそっとふいた。

「おうちに帰りたいの。」

「大丈夫よ。次の駅で降りて、夕焼け列車に乗ればおうちに帰れるわ。」

「夕焼け列車？」

「うん、夕焼け列車。だれもがちゃんとおうちに帰れる列車よ。」

次の駅は夕焼けに包まれた海辺の駅だった。

ホームの反対側にはオレンジ色の列車がとまっていた。

「お姉さんも一緒に乗らない？」

女性は首をゆっくり横にふった。

「私は行けないの。」

女性はしゃがんで、小雪にほほえんだ。

「小雪ちゃんは一人で初雪列車に乗れたでしょ。だから夕焼け列車も大丈夫。」

「小雪ちゃんが帰らないと、お父さんが悲しむでしょ。」

小雪はこっくりなづいた。

女性はやさしく小雪をだきしめた。

「小雪ちゃん。行ってらっしゃい。」

小雪は勇気を出して、初雪列車を降り、夕焼け列車に飛び乗った。

小雪はオレンジ色の車内を走り、窓から初雪列車を見た。それと同時に夕焼け列車は走り出した。

初雪列車の中から女性がずっと小雪に向かって、手を振っていた。小雪は優しい夕焼けの光を浴びながら、ゆっくりまぶたを閉じた。

「小雪、小雪、起きなさい。」

なつかしい優しいいつもの声で、小雪は目を覚ました。  
いつもお父さんを待っている駅のホームのベンチにいた。

「あれ・・・？」

小雪がきよろきよろ回りを見ていると

「小雪。何をねぼけているんだ？こんな場所でねていたら、風邪を引くぞ。しょうがないなあ。」

お父さんはコートをぬいで、小雪をくるりとまき、抱き上げた。

夕焼け色に染まった雪の上をオレンジ色の列車が走っていくのが見えた。

おしまい